

2025 Middle Eastern and Islamic Studies in Japan: The State of the Art (No.15)

日時：2025年11月28日（金）10:00～14:00

場所：Japan Center for Middle Eastern Studies, 2nd Floor, A2-1, Azariyeh Bldg, Beirut Central District

“Hizb ut-Tahrir as an Anti-Globalist Movement”

山岡 陽輝（慶應義塾大学大学院）

報告内容

これまで、暴力に訴えるジハード主義組織の研究が蓄積されてきたが、近年、非暴力でありながら過激な言説で人々を惹きつけるイスラーム主義組織が注目されており、「非暴力な過激主義（nonviolent extremism）」として類型化されている。本報告では、その典型例である解放党（Hizb ut-Tahrir, Hizb al-Tahrir）を事例として、いかなる点が「過激主義」と評価され得るかを検討した。具体的には、グローバル化とグローバリズムに対する彼らの態度を多角的に分析する手法をとった。

報告者が注目したのは、解放党の言説が質的に二分されている点であった。すなわち、解放党の言説には、①樹立が目指されるイスラーム国家論のように、精緻に練り上げられたイデオロギーと、②サイバー空間を中心に発信される、日々の政治についての排他的でパターン化された解釈が併存している。①解放党が理想とするイスラーム国家とは、カリフ制国家である。今日においてその再興を訴えることは、国民国家体制の正統性を否定し、カリフ制国家がそれを代替することを意味する。この動きは、国民国家体制の導入や、人々のアイデンティティの宗教からネーションへの移行といった、政治的・文化的なグローバル化に対する根源的な反対と位置づけることができる。他方で、②解放党の日常的な政治解釈は、「想像の共同体」であるウンマを基盤とし、それを「裏切る」とみなされたイスラーム諸国のエリートや、米国をはじめとする西側諸国、国際機関などを非難するものである。これは右派ポピュリストと同様に、反エリート主義・反グローバリズムの主張と理解される。本報告では、解放党の「過激主義」性は、既存の秩序の正統性を根源的に否定する点と、国内外のアクターを言説によって排他的に攻撃する点に求められると結論づけた。

ディスカッションの概要

本報告に対して、Sari Hanafi 先生（American University of Beirut）がコメンテーターを務めてくださった。Sari 先生及び会場の参加者からは、以下の貴重なコメントをいただいた。①支部間にはそれぞれの社会的な文脈に応じた違いが存在するため、言説分析に加えてインタビューを行うことが有効であること、②「過激主義（extremism）」という用語はレッテルとして機能し得るため、リベラル・非リベラルといった判断基準を明確にする必要があること、③解放党の思想は反グローバリズムではなく、西洋的なグローバリズムへの反対と理解

する方が実態に即していること、④国民国家への反対は必ずしもイスラーム主義者に限られるものではなく、その主張の内実を紐解く必要があること、である。

会議参加の感想

本研究会は、報告・ディスカッションともに十分な時間が配分されており、報告者がこれまで参加した他の学会等と比べても、特に詳しくコメントをいただくことができた。ディスカッションの内容は研究の枠組みに関してクリティカルであったが、具体的な方向性についても提示していただいたことで、報告者にとって極めて得るものの多い機会となった。今後は、研究成果の発表の中で、これらのコメントを活かしていきたい。

研究会以外の日程では、現地の研究機関への訪問や食事の場などを通して、多くの知見を得ることができた。不安定な情勢であったが、（一部地域ではあるものの）ベイルート市内の現在の様子を知ることができたこともよかった。さらに滞在中は、先生方や他の参加者から、研究へのコメントからそれぞれのフィールドの話まで、幅広い情報を得ることができ、大きな学びとなった。総じて、大変に素晴らしい滞在中で非常に多くのものを得ることができたと感じている。

黒木先生、後藤先生、スタッフの皆さまには、滞在中のみならず渡航前の準備も含めて、大変お世話になりました。Sari先生を中心とするコメンテーターの先生方からは、建設的で貴重なコメントをいただきました。また、ご一緒に参加された岩田さん、岡部さんからも、多くを学ばせていただきました。深く感謝申し上げます。